

『あの町から遠く離れて』

登場人物

秀人(有紀の夫、工業大学の研究員)

有紀(秀人の妻、四年前から子供と大阪で暮らしている)

麻美(秀人の父の妹、脚本家)

正夫(秀人の母の弟)

船長(秀人たちが乗り合わせたフェリーの船長らしき人)

藤春(コンビニエンスストアを経営する家族の長男、自称演出家)

佐々木(冷凍食品工場の経理、常にリュックサックを背負っている)

楓(藤春の妹、コンビニエンスストアの店長)

東口(コンビニエンスストアのアルバイト)

白衣の男/お茶の水博士

男1/ゴドージラ

男2/老人

乙姫

亀次郎

漁師

アトム

鳩

プロローグ

早朝。大阪のとある小さな神社。

老人が一人たたずんでいる。その近くには鳩が一匹。

老人、パンをちぎって投げる。

老人
ほれ。

鳩
クルックー。

鳩、パンを食べる。

そこへ、喪服の女(有紀)がやって来る。大きな旅行鞆を持っている。

有紀
おはようございます。

老人
あ、見られてしまいましたな。

有紀
え？

老人
(注意書きを読んで)鳩に餌やり厳禁。

有紀
ああ。

老人
神主さんの娘さんに見つかってしまおうとは、これは怒られますかな。

有紀
いえいえ、少しくらいなら。

老人
そうですか。じゃあお言葉に甘えて。ほれ。

老人、パンをちぎって投げる。

鳩
クルックー。

鳩、パンを食べる。

老人
どなたか、お亡くなりになったんですか？

有紀
え、ああ、義理の父の一周忌で。

老人
ああ、そうでしたね。去年の台風で。

有紀
はい。

老人
そうですか。もう一年になりますか。どこかの島でしたね？

有紀
はい、伊豆諸島の。

老人
そうでしたそうでした。船で行くんですか？

有紀
そうですね。東京まで新幹線で行って、そこから。

老人
船はいい。船はいいですよ。ということは亜土夢ちゃんはお留守番ですか？

有紀
ああ、ええ、はい。

老人
子供もいい。子供もいいですよ。私にももうすぐ曾孫が出来るんですよ。まさか

こんな長生きできるとは思いませんでした。何だか申し訳なくて。何だか申し訳なくてねえ。

有紀
はあ。

老人
ずっと待ってるんですけどね。誰も帰って来ないんです。

有紀
え？

老人
昔約束したんですよ。ここで会おうって。この九段坂の上にある神社で会おうっ

有紀　九段坂？
でもね、誰も帰って来ないんですよ。おかしいこともあるものです。ほれ。

老人、パンをちぎって投げる。

鳩　クルックー。

鳩、パンを食べる。

有紀　あの、ここは九段坂じゃないですよ。ここ八段坂です。
老人　え？

有紀　もしかしたら別の神社とお間違えになってるんじゃない。
老人　ああ、そうでしたか。ああ、なるほど、どおりで誰も帰って来ないわけだ、ははははは。いやあ、昔ね、船に乗ってたんですよ。その船が沈められましたね。大勢死にました。船は怖い。船は怖いですよ。ほれ。

老人、パンをちぎって投げる

鳩　クルックー。

鳩、パンを食べる。

老人　ああ、すみません、これから船にお乗りになるんですね。
有紀　いえ。

老人　ところで『ハワイ・マレー沖海戦』って映画ご存知ですか？
有紀　え？

私はその映画の模型を作ってたんですよ。それで取材の為によく船を見に行つたものです。船はいい。船はいいですよ。ボーって汽笛が鳴るじゃないですか。ボーって。あれが何ともいいんですよ。ボー。ボー。ボー。

遠くから汽笛の音が聞こえてくる。

老人　ボー。

場面転換。

フェリー①

数日後。

低いディーゼルエンジンの音。汽笛。洋上を進む一隻のフェリー。その二等船室。そこに喪服の男(秀人)がやって来る。

秀人 ただいま。

有紀 お帰り。

秀人 あれ、珍しいな。

有紀 何が？

秀人 本。

有紀 ああ、私だって本くらい読むよ。

秀人 何読んでるの？

有紀 (表紙を確認して)ベケット、ゴドーを待ちながら。

秀人 ゴドーを待ちながら？

有紀 麻美さんにかしてもらったんだけど。

秀人 ふーん、面白い？

有紀 よくわかんない。

秀人 あの人、昔から難しい本ばかり読んでるからな。

有紀 そうなんだ。地雷踏んだかなあ。

秀人 地雷？

有紀 いや、何読んでるんですか？って聞いただけなんだけど。面白いから読んでみて

有紀 って。半ば強制的に。

秀人 ああ、そういうことか。あれ、そういえば、麻美さんと正夫さんは？

有紀 さっき二人そろって出て行ったけど。

秀人 どこ行ったんだろ。

有紀 秀人こそ、どこ行ってたの？

秀人 え、電話。

有紀 あれ、ここまだ携帯通じるんだ。

秀人 いや、上に公衆電話があるから。

有紀 ああ、そうなんだ。仕事？

秀人 うん、午後のフェリーに間に合うかどうか分からないって伝えてあったから、間に合ったって。

有紀 相変わらず忙しいね。

秀人 うん、ちょっと大学でトラブルがあったみたいで。

有紀 トラブル？

秀人 詳しいことは聞いてないんだけど、とにかく帰ったらすぐ顔出してくれて。月末にロボットの試験走行が控えてるからさ、みんなピリピリしてるんだよね。前

回は足回りのモーターが調子悪くてうまくいかなかったからさ。

有紀 ふーん、ま、ほんと相変わらずって感じだね。

秀人 …あのさ。

有紀 なに？

秀人 靴下脱いでいい？

有紀 なに？

秀人 靴下脱いでいい？

有紀 なに？

秀人 靴下脱いでいい？

有紀 え？
秀人 靴下。
有紀 何で。
秀人 いや、ちょっとリラックスしたいなって思っ
有紀 脱いだら？

秀人、靴下を脱ぎながら。

秀人 今日は暑かったからさ。もう九月も末なのに。
有紀 ねえ。
秀人 なに？
有紀 ほんとによかったの？
秀人 何が。
有紀 こんなに早く帰って来て。秀人だけでももう一泊すればよかったのに。
秀人 ああ、いいよ。
有紀 お義母さん、やっぱり寂しそうだったけど。
秀人 大丈夫、兄貴がついてるから。大丈夫、だって。
有紀 それならいいんだけど。
秀人 有紀こそ、今日はありがとう。
有紀 え。なに。
秀人 親父の一周忌にわざわざ来てくれて。
有紀 それは来るよ。お義父さんにはいろいろお世話になったから。あの子の病院のこ
ととか。
秀人 うん。
有紀 でもちよっと複雑だったな。
秀人 複雑？
有紀 私たちが別居してること言っていないでしょ。
秀人 悪いな。まだちよっと言えるような状況じゃないから。
有紀 わかっている。
秀人 落ち着いたら、そのうち。
有紀 結婚って不思議だね。見ず知らずの他人がある日突然、家族になるんだから。
秀人 うん。
有紀 まあ、私たちはその逆なわけだけど。そうそう、忘れないうちに返しとくね。こ
れ。
有紀、封筒を渡す。
有紀 ハンコ、押しといたから。
秀人 今、このタイミングで？
有紀 一周忌が終わるまでに書いてくれて渡したのは秀人でしょ。
秀人 そうだけど。まだ東京に着いてない。
有紀 は？
秀人 家に帰るまでが遠足だろ。それまで持ってきてくれ。
有紀 …うん、まあいいけど。

そこへ年配の女(麻美)がやって来る。

麻美 だいたい。

秀人 おかえりなさい。あれ、麻美さん着替えたんですか？

麻美 うん、島で着替える時間なかったでしょ、トイレで。あ。

麻美、突然引き返す。

秀人 どうしたんだろ？

有紀 あのさ、今のうちにちょっと確認したいことあるんだけど。
なに？

有紀 麻美さんは秀人のお父さんの妹さんでしょ？

秀人 そう。

有紀 正夫さんは？

秀人 俺のおふくろの弟。

有紀 そっか。了解。

秀人 今更？

有紀 だってこういう時にしか会わないし。それに、まさか帰りが一緒になるとは思っ
てなかったから。

秀人 去年も会ってるだろ。葬式の人に。

有紀 あの二人の関係がよくわかんなくて。あれ？ 正夫さんって麻美さんの旦那さん
だっけってなったんだよね。

秀人 何で。

有紀 何か仲良さそうだったし。

秀人 二人とも独身だよ。

有紀 そっか。そうだよ。よかった変なこと言わなくて。

秀人 まだそういうの気遣うんだな。

有紀 当たり前でしょ。

秀人 もうすぐ他人になるのにな？

有紀 ……これ渡すまではまだ親族だから。

秀人 つくづく、不思議なもんだな。

そこへ麻美、鞆を持って戻って来る。

麻美 ふう、危ない危ない。

秀人 どうしたんですか？

麻美 うっかりこれトイレに忘れちゃって。

秀人 大きな忘れ物ですね。

麻美 着替えたら少しほっとしたのかも。あなたたちも着替えてきたら？ その方がゆ
っくりできるでしょ。

秀人 どうする？

有紀 あとどれくらいで着くかによる。

秀人 さっき出たとこだから、三時間半くらいかな。

麻美 ほら、旅は長いんだから。
有紀 じゃあ着替えませう。
秀人 俺もそうするか。
麻美 そうしたら？

有紀と秀人、着替えの準備。

麻美 さてと、私は一仕事するかな。
秀人 え、仕事ですか。
麻美 うん。
秀人 忙しいですね。

麻美、ノートを鞆から出す。

麻美 違うのよ。ちょっと頼まれちゃって、役場の観光課に勤めてる同級生に。
秀人 何をですか？
麻美 映画のプロット。来年、島で町おこしの映画祭するんだって。
秀人 映画祭？
麻美 ほら、島が何度か怪獣映画のロケ地になってるでしょ、それで。昭和の特撮から
ポケットモンスターまで、怪獣は世界に誇る日本の文化とか何とか言って、予算
引っ張ってきたらしいのよ。要するにクールジャパン政策の二環ってやつね。で
もあの人たち映画は素人だから私にお鉢が回ってきたってわけ。

秀人 ああ、なるほど。
麻美 そうそう、ポケットモンスターで思い出したけど、亜土夢ちゃん元気？
秀人 え？

麻美 久しぶりに会えると思って楽しみにしてたのに。
秀人 ああ、今回もちよっと連れて来れなかったんですよ。なあ。
有紀 ええ。

麻美 そうなんだ、残念。いくつになるんだっけ？
秀人 えーっと、ことしで七歳です。
麻美 もうずいぶん大きくなってるとでしょうね。私が最後に会った時は赤ちゃんでこんなだったから。

秀人 まあスクスク育ってますね。
麻美 子はかすがいって言うからね。私も子供がいたら離婚しなくて済んだんだけど。
秀人 …はい、ここ笑うところよ。

秀人 笑えませんよ。ていうか、何でポケモンで思い出すんですか？
麻美 前にあった時、ぬいぐるみ抱いてたじゃない。
秀人 そうでしたっけ？
麻美 抱いてた抱いてた、背中にチャックがついてて鞆にもなるやつ。

そこへ、白い制服に身を包みパイプをくわえた渋めの男（船長）がやって来る。

船長 すみません。
秀人 …はい。

船長 犬、みかけませんでしたか？

秀人 え？

船長 犬。

秀人 いえ、みかけませんけど。

船長 そうですか。全く、どこに行っちゃったんだアイツは。

秀人 …。

船長 ああ、申し遅れました。私、この船の船長をやっておりますセイフと申します。盛り上がるのモリに富士山のフジで盛富です。なかなか、景気の良い名前でしょう、はっはっはっはっはっ。いや、犬がね、どこかに行っちゃいますよ。乗客の皆様にご迷惑をかけてやしないかと、こうやってね、探してるんですよ。ああ、心配は無用ですよ、船長というものはね、出港してしまうと意外に暇なものなんです。うちは特に他の乗組員が優秀ですからね。まあ、航海の安全は保障します。よい旅になりますよ。それでは失礼。

船長、立ち去る。

秀人 何なんだろ。

有紀 さあ。

秀人 …じゃあ、行こうか。着替えに。

有紀 うん。

秀人 留守番お願いします。

麻美 はいはい。

有紀と秀人、立ち去る。

そこへ、年配の男(正夫)がやって来る。

正夫 あれ？ お一人ですか？

麻美 今ちようど着替えに。

正夫 ああ、なるほど。何されてるんですか？

麻美 映画のプロット。

正夫 ああ、例のあれ、島の観光課の、早速ですか。

麻美 そうなんです。帰ったら帰ったで仕事がありますから。

正夫 お忙しいですね。

麻美 まあ頼まれた以上はね。

正夫 今年は大丈夫でしたか？

麻美 え？

正夫 台風。

麻美 ああ、ええ。

正夫 それはよかったです。

麻美 もう一年になるんですね。

正夫 そう、もう一年。早いなあ。

麻美 あの日はすごかったですよね。一晩中土砂降り。雷がすごくて。

正夫 はい、うちもそうでしたよ。

麻美 床下浸水なんて初めてで、ほんと正夫さんが来てくれて助かりました。

正夫 いやあ、お役にたてたかどうか。
麻美 でもまさか、兄がね。同じ日にあんなことになってるなんて思いませんでしたけど。
正夫 そうですね。
麻美 昔からそういうところがあったんですよ。無鉄砲というか何というか。あんな日に川の様子を見に行くなんて。
正夫 責任感の強いお人でしたから。
麻美 だからこの仕事引き受けたっていうのもあるんですよね。
正夫 え？
麻美 洪水被害の復興も兼ねてるそうなんです。
正夫 ああ、なるほど。
麻美 私としては島の観光課が考えそうな安易な企画だとは思いますが、ま、何もやらないよりはね。
正夫 そうですね。麻美さん。
麻美 何ですか？
正夫 東京に戻ってからのことなんですけど。
麻美 はい。
正夫 何か予定入ってます？
麻美 え、いえ、特には。
正夫 はあはあ、いや、こんな日にあれなんですけど、もしお時間よろしければ、一緒にお食事でもどうですか？ いや、お時間あったらでいいんですけど。お忙しそうですね。駄目かなあ、はははは。
麻美 私は大丈夫ですけど。
正夫 え？ほんとですか、いやよかった、いいお店みつけたんですよ。御馳走しますから。このあいだのお礼です。
麻美 このあいだって？
正夫 ほら、六月の。
麻美 ああ、でもあれはお花見の時のお礼のつもりでしたから。
正夫 いえいえ、僕としてはお花見のあれはお正月の御馳走のお礼でしたから。
麻美 でもお正月のあれは台風の時のお礼のつもりだったんですけど。
正夫 まあいいじゃないですか。せっかくですから。
麻美 ；はあ、まあ、わかりました。
正夫 よかった。実はもうお店予約してるんですよ。
麻美 え？
正夫 キャンセルしなくて済みましたよ、はははは。よし、後は。
正夫 正夫、上着のポケットを押さえるが。
正夫 ん？ ん？
麻美 どうしたんですか？
正夫 あれ？あれ？おかしいな。…どこいったんだろ。
麻美 何か失くされたんですか？
正夫 いえ、別に。あれ？
麻美 大事なものですか？

正夫 いや、その、あれ？ ちょっと見てきていいですか？
麻美 あ、はい。

正夫、立ち去る。

麻美 …おかしな人。さてと、じゃあこれ着くまでにやっってしまったわねえと。

麻美、プロットを考え始める。

麻美 千葉県。とある大学のそばにあるコンビニエンスストア。その煌々と輝く不夜城の前で二組の男女が演劇の練習をしている。

男(藤春)と女(佐々木)の声が聞こえる。

藤春 さあ、もう行こう。

佐々木 だめだよ。

藤春 何故さ。

佐々木 ゴドーを待った。

藤春 ああ、そうか。

麻美 一方その頃、愚かな人類の過ちにより、南太平洋の深海で眠っていた伝説の怪獣、

ゴドージラが目覚めました。

さあ、もう行こう。

藤春 だめだよ。

佐々木 何故さ。

佐々木 ゴドージラを待った。

藤春 ああ、そうか。

麻美 ゴドージラは二人の言葉に呼び寄せられるように、一路、日本を目指しはじめた。

そしてそのルート上には一隻のフェリーが。

と突然、フェリーが何か大きなものに衝突する音と共に大きく揺れる。

麻美、よろける。

麻美 え、ちょっと、なに？

もう一度、衝突音と共に大きな揺れがフェリーを襲う。

麻美、倒れる。

麻美 なになに、何なの？

場面転換。

ゴドーを待ちながら①

深夜。千葉県にあるとあるコンビニエンスストア。その駐車場。店の漏れ明かりの中で、ジャージの中年男(藤春)と若い女(佐々木)が台詞あわせをしている。佐々木はリュックサックを背負っている。

藤春 さあ、もう行こう。

佐々木 だめだよ。

藤春 なぜさ。

佐々木 ゴドーを待ったんだ。

藤春 ああ、そうか。

間。

藤春 しかしもう来てもいいはずだがな。

佐々木 確かに来ると言ったわけじゃない。

藤春 じゃあ、来なかつたら？

佐々木 明日、もう一度来てみるさ。

藤春 なるほど、それから明後日もな。

佐々木 そりゃあそうさ。

藤春 ちよっと待ってくれ、俺たちは昨日もここへやってきたんだぜ。

佐々木 いいや、それは違う。

藤春 え？ じゃあ、昨日は何をしていた？

佐々木 昨日なにをしたかかって？

藤春 そうさ。

佐々木 そりゃあ。

藤春 俺たちは昨日もここにいたんだ。

佐々木 場所に見覚えはあるのかい？

藤春 そうは言わない。

佐々木 じゃあ何だ。

藤春 しかしだな。

そこへコンビニの中から店員の男(東口)が現れる。

東口 ちよっと、すみません。

藤春 確かに今晚なのかい？

佐々木 何が？

東口 すみません。

藤春 待ち合わせさ。

佐々木 土曜って言った。

藤春 いったいどの土曜なんだ。それに今日は土曜かね？ むしろ日曜じゃないかな。

いや、月曜か？ それとも、金曜か？

東口 ああ！

間。

東口 何やってるんですか？

藤春 え？

東口 何やってるんですか？

藤春 いや、稽古だけ。

東口 稽古？

藤春 うん。

東口 あそこの看板読めます？

藤春 読めるよ。

東口 読んでみてください。

藤春 コンビニエンスストア、デイデイマート。

東口 余所でやってもらえます。

藤春 余所ってどこ？

東口 あつちに公園がありますよ。

藤春 あの公園は街灯が少なく暗いんだよ。暗いと台本が読めないからさ。それに比べて、みるよ、この煌々と輝く不夜城を。この明かりを利用しない手はないだろ。

東口 いやだから迷惑なんですすよ。

藤春 買っただろ。

東口 え？

藤春 ほら、缶コーヒー。二本も。

東口 それで？

藤春 だったら俺たちにもこの駐車場を使う権利があるはずだ。

東口 あのね、警察呼びますよ。

藤春 呼べるものなら呼んでみるよ。だがその前に、店長呼んで来い。

東口 は？

藤春 お前バイトだろ。下っ端と話してても埒があかん。店長呼んで来い。

東口 …わかりました。

東口、立ち去る。

東口、立ち去る。

佐々木 藤春さん。

藤春 なに。

佐々木 大丈夫なんですか？

藤春 何が。

佐々木 やっぱりこんなところで迷惑なんじゃ。

藤春 大丈夫。俺には強力なコネがあるからな。

佐々木 コネ？

藤春 まあ、みてな。それより何か質問はないかな？

佐々木 質問？

藤春 まず軽く冒頭からやってみたわけだけど。

佐々木 そうですね。これって聞いていいことかどうかわかんないんですけど。

藤春 なになに。

佐々木 この二人はゴドーをずっと待ってるんですね。

藤春 そうだよ。
佐々木 その、ゴドーというのは何者なんですか？
藤春 なるほど、それは一番聞いてはいけないことだね。
佐々木 すみません。
藤春 でもいい質問だ。
佐々木 はあ。
藤春 まあ、それを考えるためにこの上演はあるとも言えはいいのかな。そもそもこの『ゴドーを待ちながら』という戯曲は上演されるシチュエーションが実は一番重要なんだよ。例えば有名なのはスーザン・ソングが紛争中のサラエボで上演したやつだね。ソングは現地サラエボで俳優を募集し、照明の代わりに三十本の蠟燭を使ったんだ。これはまあサラエボの電気事情が関係したともいえるんだけど、

藤春が熱く語っている間に店長(楓)がやって来る。

楓 ちよっと。
藤春 おお、来た来た。
楓 なになに、ここで何してんの。
藤春 稽古だよ。
楓 稽古？
藤春 いやー、いろいろトラブっちゃってな。
楓 何トラブルって。
藤春 役者が急に降板することになってさ。しかも一度に五人も。本番は三日後だしさ、切羽詰ってるんだよ。
楓 そんなの知らないし。どっか余所でやってくれる？
藤春 そんな冷たいこと言うなよ。
楓 この人は？
藤春 昔のバイト先の同僚で、ほら小学校の隣の冷凍食品工場で働いていたことあっただろ。その工場で経理を担当されてる佐々木さん。
佐々木 佐々木といいます。初めまして。
楓 その佐々木さんが、どうして兄ちゃんの演劇に？
藤春 俺がさ、度重なるトラブルに絶望して駅前で飲んだくれてたら偶然再会したんだよ。で、いろいろ愚痴ったら、何か出演してくれることになって。
楓 ということは佐々木さんも演劇を？
佐々木 いえ、今回が初めてなんです。でも以前、藤春さんに誘われてお芝居を一度だけ見たことがあって。それがすごく面白かったから。この際、清水の舞台から飛び降りるつもりで。
藤春 というわけなんだよ。まあ、大目にみてくれよ。
楓 それは無理。
藤春 何で。
楓 邪魔だから。
藤春 売り上げに貢献してやっただろ。
楓 缶コーヒー二本で何を偉そうに。
藤春 おい、バイト君が呼んでるぞ。

楓 え？

藤春 何かあったんじゃないのか？

楓 もう。とにかく本当に頼むからどっか余所でやって、ね。お願いだから。
藤春 : 仕方ねえな、わかったよ。

楓、立ち去る。

佐々木 この店長さん、妹さんなんですか？

藤春 おう、もともとはここ俺の家があった場所なんだよ。酒屋をやっけてさ。さてと、さっきの続きやるか。

佐々木 え、でもさっき、仕方ねえな、わかったよって。

藤春 あれはまあ方便だよ。大丈夫大丈夫。それより時間ないんだから。気合い入れていかないと。じゃあ、もう一度最初からやるか。

佐々木 はい。あ、でもその前にひとつだけいいですか。

藤春 なに？
佐々木 さっきの質問の続きなんですけど、藤春さんは、何を待ってるんですか？
藤春 え？

佐々木 藤春さんも待ってるんでしょ、何かを？
藤春 俺が。待ってる？

佐々木 だからこの作品を、何ていうか上演するのかなと思って。
藤春 : まあ確かに、待ってるといえれば待ってるかな。

佐々木 何を待ってるんですか？
藤春 うーん、そうだな、デカイ一発を、かな。

佐々木 デカイ一発？
藤春 世の中が引っくり返るような。この日常が引っくり返るような。
佐々木 …。

藤春 ま、そんなのは結局来ないんだけど。この終わりなき日常は永遠に続いていくわけだよ。うん。

佐々木 なるほど、ということは藤春さんは来てほしいってことですよね？
藤春 どういうこと？

佐々木 ゴドーにですよ。
藤春 : そりゃ来てほしいかもね。

佐々木 どうしてですか？
藤春 そしたらさ、何ていうかさ、生きてる実感っていうか、うーん、難しいな。

佐々木 あれ。
藤春 どうしたの。

佐々木 今何か聞こえませんでした？
藤春 え？

佐々木 ドーンって音が。
と突然、あたりが真っ暗になる。

藤春 : 何。どうしたんだろ？
佐々木 停電ですかね。

藤春 停電？
佐々木 : 藤春さん。
藤春 なに。
佐々木 もしかすると来たのかもしれないよ。
藤春 何が？
佐々木 デカイ一発が。

場面転換。

引き揚げ船

数十年前。夜。満天の星空。低いディーゼルエンジンの音。
太平洋の洋上を進む一隻の船。
手に包帯を巻いた男(男2)が甲板に座り海を眺めている。
そこへ男(男1)がやって来る。

男1 おう。
男2 あ。軍医殿。
男1 下にいないと思ったら、こんなところで、どうしたんだ？
男2 いえ、ちょっと。
男1 ちょっと？
男2 夜風にあたりたくて。
男1 夜風？
男2 はい。
男1 ああ、まあ確かに、あんな船底にいると息が詰まるな。

男1、満天の星空を見上げて。

男1 南十字星もずいぶん低くなったな。
男2 そういえば、そうですね。
男1 もうすぐ見納めかな。
男2 だいたいなんですけど。
男1 傷はどう？ もう大丈夫？
男2 ああ、はい、お蔭様で。まだ少しつっぱりますけど。
男1 そうか。頃合い見計らって本土に着く前に抜糸しないと。
男2 はい。ありがとうございます。
男1 何、急に。
男2 そういえば、お礼言っていなかったなと思ひまして。軍医殿が通りかからなかったら今頃どうなっていたことか。
男1 ああ、運が良かったよ。いや、当たりどころが良かったって言うかな。
男2 嫌な予感がしたんですよ。
男1 嫌な予感？

男2 何か起こりそうな。そしたら急に敵機が来て、自分以外はみんなその時に
 男1 …。
 男2 手、動くようになりませんかね。
 男1 それは大丈夫。骨も神経も無事だから。
 男2 動くようになるといいなあ。
 男1 仕事は何してるんだ？ 向こうに帰ったら。
 男2 カツドウ屋です。
 男1 え？ かつ井屋？
 男2 カツドウ屋です。映画のことです。
 男1 ああ、映画のことか。
 男2 裏方なんですけど。撮影で使う模型を作ってます。
 男1 模型？
 男2 特殊撮影に使うこんな小さな戦闘機とか戦艦とか、『ハワイ・マレー沖海戦』っ
 男1 ていう映画ご存じないですか？ 下っ端ですけどあれに関わってたんです。
 男2 いや、見たことないな。
 男1 そうですか。とにかく手が動かないと困るんです。
 男2 ま、帰ったらゆっくり養生するといいよ。その怪我ならばらく召集されること
 男1 もないだろ。
 男2 僕たち本当に帰れますかね。
 男1 帰れるよ。ここまで来たんだから。
 男2 聞いてませんか？ 白山丸の話。潜水艦の待ち伏せにあって沈められたって。
 男1 そのために護衛艦もついてるんだから、あっちもそうそう手出しはできませんよ。
 男2 だといんですけど。
 男1 …さてと、俺はもう一眠りするかな。君も眠れるうちに眠っておいた方がいいよ。
 男2 はい。あのに。
 男1 もう少しここにいませんか？
 男2 どうして？
 男1 嫌な予感がするんです。
 男2 嫌な予感？
 男1 船底に戻ったら、二度と出てこれないような気がして。
 男2 …人間死ぬ時はびっくりするほどあっさり死ぬし、生き残るときはわけもなく生
 男1 き残る。そういうものだよ。
 男2 僕は生きて帰らないといけないんです。
 男1 どうして？
 男2 待っていてくれる人がいるんです。
 男1 それは俺もだよ。誰だってそうだよ。いや誰だってそうだった、かな。
 男1、船底に降りてゆく。
 男2がそれを見送ると船橋の伝声菅から声上がる。

男の声 雷跡発見！
 男の声 雷跡発見！
 男の声 左舷約八十度。

男の声 左舷約八十度。
男の声 取り舵いっばい。
男の声 取り舵いっばい。
男の声 全速前進。
男の声 全速前進。
男の声 総員非常配置につけ。面舵十五度。
男の声 面舵十五度。

魚雷が船に命中し爆発、水しぶきが上がる音。
非常ベルが鳴り響く。

男1 おい、起きろー、みんな起きろー、起きるんだー、早く起きろー。起きるんだー。

二発目の魚雷が命中する。爆発音、水しぶきが上がる音。

男2 (モノローグ) H型貨客船、大和丸、1944年6月11日、日本領サイパンより引上げ疎開者、および負傷兵445名を乗せてタナバグ沖から横須賀へ就航後、13日未明、硫黄島南南東320キロでアメリカ潜水艦ホワイトチップの発射した魚雷二本を第四倉庫、機関部に受け沈没。445名中442名が死亡。後に救助されたのは軍関係者一名、民間人二名のたった三名であった。

場面転換。

フェリー②

大きな衝突音と揺れから数時間後。
太平洋の洋上にあるフェリーの二等船室。
有紀がウツラウツラ寝ている。そのそばで秀人が本を読んでいる。

有紀 うわ！
秀人 ……どうしたの？
有紀 いや、ちょっとウトウトしてた。あー、びっくりした。
秀人 何か悪い夢でも見た？
有紀 うん、変な夢みた。
秀人 変な夢？
有紀 船が沈む夢。
秀人 ちよっとやめろよ、縁起でもない。
有紀 いや、この船じゃなくて、もっと昔の船、日本の兵隊が乗ってた、たくさん。それが、魚雷を受けて、沈む夢。
秀人 どちらにしても縁起悪いよ。
有紀 おじいさんから話聞いたからかな。
秀人 おじいさん？

有紀 たぶん近所に住んでる、いつもうちの神社の境内で鳩に餌やってるお爺さんがいるんだけど、こっち来る前にそのお爺さんと話しして、昔乗ってた船が沈んだとか何とか。『ハワイ・マレー沖海戦』がどうか。

秀人 『ハワイ・マレー沖海戦』？

有紀 何かそのお爺さん昔、映画の仕事をしてたとかで。

秀人 映画か。映画なら麻美さんに聞いたら何かわかるかもな。

有紀 そういえば、麻美さんと正夫さんは？

秀人 麻美さんは情報集めて来るって。上に。

有紀 また？

秀人 また。

有紀 船室で待機してないといけないんじゃないの？

秀人 まあそうなんだけど、あの人落ち着きないから。

有紀 正夫さんは？

秀人 それがさっきから正夫さんの様子が変わんだよ。

有紀 変？

秀人 よくわからないんだけど。ずっとウロウロしてるんだよ。

とそこへ正夫がやって来る。正夫は頭を怪我している。

正夫 ああもう、どうしよう。どうしよう。どうしよう。どうしよう。

正夫、船室をウロウロする。

秀人 正夫さん、どうかしたんですか？

正夫 …いや、別に。

秀人 別にじゃないですよ。怪我人なんですから。

正夫 こんなのかすり傷だよ。

秀人 いやいや、頭はびっくり割れてましたよ。安静にしとかないと。

有紀 そうですよ。

秀人 それに事故の原因がはっきりするまでは、船室に待機するようにアナウンスがあったでしょ。

正夫 それはわかってるんだけど。

秀人 どうしたんですか？ 何かあったんですか？

正夫 うん、いや、大丈夫だから。ああ、もうどうしよう。どうしよう。

正夫、立ち去る。

有紀 何あれ。

秀人 な、おかしいだろ。

そこへ麻美がやって来る。何やら膨らんだ鞆を抱えて。

麻美 ただいま戻りました。

秀人 おかえりなさい。

麻美

よいしょ。

麻美、鞆を下ろす。

麻美

いや、まさかこんなことになるなんてね。

秀人

で、どうでした？ 上の様子は？

麻美

うん、とりあえず落ち着いたみたい。さっき海上保安庁のヘリが来て重傷の人を吊り上げて救助してた。ほら、海猿ってやつ。初めて生で見たわ。

秀人

麻美さん、何かテンション上がってませんか？

麻美

え、そんなことないよ。

秀人

そうですね。怪我人もでてるんですから。

麻美

わかっています。

秀人

それで、いつになったら動くんですか？

麻美

それがわからないらしいのよ。

秀人

え。

麻美

どうもあの衝撃で舵が壊れたみたいだね。助けが来るのを待つしかないみたい。

秀人

助けって？

麻美

今、海上保安庁の船が何隻かこっちに向かってるらしくて、それで引っ張るんだ

有紀

って、この船を。

秀人

で、原因は何なんですか？

麻美

うーん、それもはっきりとはわからないんだけど、鯨じゃないかって。

有紀

鯨？

麻美

時々あるんだって。船が鯨に衝突することが。

秀人

鯨であんなことになります？ かなりの衝撃でしたよ。

麻美

かなり大きい鯨だったんじゃない？

有紀

鯨を見た人はいるんですか？

麻美

それはいないみたいなんですけど。ああ、そうそう、潜水艦じゃないかっていう人もいた。

秀人

潜水艦？

麻美

ほら昔あったでしょ。アメリカの原子力潜水艦と水産高校の船が衝突して転覆した事件。

秀人

ああ、ありましたね。

麻美

まあはっきりした原因はまだわからないんだけど、何か大きなものにぶつかったのは確かだね。

有紀

沈没したりはしないんですよね。

麻美

それは大丈夫みたい。

有紀

そうですね。

秀人

ちよっと怖いな。

有紀

うん。

麻美

ま、こういう時はパニックにならないことが一番大事だから。落ち着いて行動すれば大丈夫。

有紀

そうですね。

秀人

あ、まだ飲む物とか売ってます？

有紀

自動販売機。今のうちに買っておいの方がいい

麻美

あ、まだ飲む物とか売ってます？

有紀

自動販売機。

秀人

今のうちに買っておいの方がいい

有紀

自動販売機。

麻美

今のうちに買っておいの方がいい

麻美　　いすよね。
そんなのとっくに売り切れてるよ。
秀人　　え？ 全部ですか？
麻美　　全部。まあこういう時、水が一番貴重品だから。
有紀　　誰かが買い占めたんですかね。
麻美　　たぶんね。
秀人　　誰だよもう。しまったなあ、買っておいたらよかった。ごめんな。
有紀　　いいよ。
麻美　　なに、のど乾いてるの？
秀人　　ええ、まあ。でも大丈夫です。
麻美　　あるよ。水。

麻美、おもむろに鞆を開ける。
秀人　　え、いいですよ、貴重な水ですから。
麻美　　大丈夫大丈夫、いっぱいあるから。はい。

麻美、秀人に水を渡す。鞆の中にはペットボトルの水が何本も。
秀人　　ちよっと、何ですかこれ、買い占めてるの麻美さんじゃないですか。
麻美　　しっ、声が大きい。
秀人　　パニックになるなどかいておいて。
麻美　　冷静に行動した結果がこれなのよ。これはサバイバルなの。わかる？
秀人　　わかる？ じゃないですよ。
麻美　　はいこれ、有紀ちゃんにも。誰に見られてるかわからないから、隠れて飲んでね。
有紀　　はあ。ありがとうございます。

そこへ、正夫がとぼとぼやって来る。
正夫　　どうしよう。どうしよう。どうしよう。
麻美　　あ、正夫さんにもこれ、お水。
正夫　　…あ、ありがとうございます。

正夫、水を受け取るが元気がない。
秀人　　正夫さん、さっきからほんとどうしたんですか？
正夫　　何でもない。
秀人　　何でもなくはないでしょう。
正夫　　麻美さん、すみません。
麻美　　え？
正夫　　せっかくお店予約したのに。
麻美　　ああ。
正夫　　これもう、間に合いませんよね。
麻美　　仕方ないですよ。事故なんですから。

秀人 お店？
正夫 美味しいお店、みつけたんだよね。
秀人 え、え、それで落ち込んだんですか？
正夫 それだけだったらいいんだけどね。あははは。
秀人 あははは？

そこへ、突然、船長がやって来る。

船長 すみません。
秀人 …はい。
船長 犬、みかけませんでしたか？
秀人 え？
船長 犬。

船長 いえ、みかけませんけど。
秀人 そうですか、おかしいなあ。どこにいっちゃまったのかなあ。…あ、今こんな大変な時に船長が犬を探している場合ではないだろうって思ったでしょう。思ったですよ。でもね、こういう時こそ、平常心というものが大切なんです。特にトップに立つ人間にはね。こんな事故があったのに船長は犬を探しているぞ。ということは大した事故ではないんだ。そうだそうだ、安全だ。こういう寸法です。
秀人 はあ。

船長 というわけなので、くれぐれも、不安を煽るような行動は慎んでください。例えば、飲料水を買って占めたり、ね。十分備蓄がありますから。よろしいですか？
麻美 はい。
船長 それでは失礼しますよ。
秀人 あの。
船長 何ですか。
秀人 じゃあ大丈夫なんですよね？ この船。
船長 はい、大丈夫です。ただちに影響はありません。
秀人 …え、ただちに？

場面転換。

ゴドーを待ちながら②

真夜中。停電中のコンビニエンスストアの前。
藤春と佐々木、懐中電灯の明かりの中で台詞合わせをしている。

藤春 さあ、もう行こう。
佐々木 だめだよ。
藤春 なげさ。
佐々木 ゴドーを待った。
藤春 ああ、そうか。しかしもう来てもいいはずだがな。

佐々木 確かに来ると言ったわけじゃない。
藤春 じゃあ、来なかったら？
佐々木 明日、もう一度来てみるさ。
藤春 それから明後日もな。
佐々木 そりゃあそうさ。

間。

藤春 さあ、もう行こう。
佐々木 だめだよ。
藤春 なぜさ。
佐々木 ゴドーを待った。
藤春 ああ、そうか。しかしもう来てもいいはずだがな。
佐々木 確かに来ると言ったわけじゃない。
藤春 じゃあ、来なかったら？
佐々木 明日、もう一度来てみるさ。
藤春 それから明後日もな。
佐々木 そりゃあそうさ。

間。

藤春 さあ、もう行こう。
佐々木 あの。
藤春 なに。
佐々木 さっきからここばかり練習してますよね。
藤春 なるほど、いい質問だ。いいかい、この冒頭のくだりにはこの戯曲の全てが凝縮されていると言っても過言ではないんだ。あとはまあオマケみたいなものなんだよ。そこで俺は考えた。役者も二人しかいないし本番まで時間もない。この冒頭を繰り返すだけで何とか上演を乗り越えられないかとね。
佐々木 乗り越えられますかね？
藤春 なるほど、いい質問だ。

そこへ、白衣の男が一人やって来る。
怪我をしているのか頭をハンカチで押さえ白衣は血で汚れている。
男は何故か靴を片一方しか履いていない。

白衣 あの、すみません。
藤春 …はい？
白衣 ちよっとお願いがあるんですけど。
藤春 なに？
白衣 靴売ってもらえませんか？
藤春 え？
白衣 靴。

確かによく見ると男は靴を片方しか履いていない。

白衣 いやー、この停電で真っ暗でしょ、転んで失くしちゃったんですよ。

藤春 ああ。

佐々木 お怪我は大丈夫ですか？ 血が。

白衣 いえ、これは大丈夫です。それより靴を売って頂けると助かるんですけど。片方だけだと歩きづらくって。

藤春 といわれましても。

白衣 二万円出します。

藤春 え？ 二万円？

白衣 これでどうですか？

白衣の男、二万円を差し出す。

藤春 わかりました。お譲りしましょう。

藤春、靴を脱ぐ。

佐々木 いいんですか？

藤春 だって二万円だぞ。こんなボロボロのスニーカーが。ラッキーラッキー。

藤春と白衣の男、靴と二万円を交換する。

藤春 さあ、どうぞ。

白衣 ありがとうございます。

白衣の男、藤春のスニーカーを履く。

藤春 あの、この靴、もらっていいですか？

白衣 ああ、かまいませんけど。

佐々木 片方だけでどうするんですか？

藤春 ケンケンしたらいけるかなあとって。

藤春、片方だけの革靴を履く。

白衣 あ、サイズもぴったりですね。

藤春 こっちもです。て、当たり前か、はははは。

白衣 ありがとうございます。ほんと助かりました。

藤春 いえいえ。

白衣 それでは。

藤春 暗いですからね、また転ばないように、お気をつけて。

白衣の男、立ち去る。

藤春 …いやー、儲けたなあ。
佐々木 あの人、その大学の人ですかね。
藤春 だろうな。
佐々木 こんな夜中に何やってたんですかね。
藤春 さあな。

藤春、ケンケンの具合を確かめる。
そこへ、店の中から楓が出てくる。

楓 はあ、もう、参ったよほんと。
藤春 おう、大変そうだな。

楓 そう思うなら少しは手伝ったら？

藤春 悪いな。俺たちも切羽詰ってるんだ。三日後には本番だからな。

楓 遊んでるようにしかみえないんだけど。

藤春 いろいろ、あって今は休憩中なんだよ。

佐々木 お店、大丈夫なんですか？

楓 うーん、アイスと冷凍食品は全滅だな、こりゃ。冷蔵のおにぎりとかお弁当だけ

藤春 でも何とか助けたいんだけど。

楓 でも電気が来ないことには無理だろ。

楓 だから今、バイト君がドライアイスを買って行ってくれてる。

藤春 ドライアイス？

楓 うん。

藤春 こんな時間に売ってるもんなの？

楓 ちよっとあてがあってね。

佐々木 で、原因は何なんですか？ この停電の。

楓 困ったことにそれがわかんないんだよね。あちこち問い合わせではいるんだけど。

佐々木 原因不明ってわけですか。

楓 せめてあとどれくらいで復旧するかわかればなあ。

藤春 うーん、やっぱり駄目だな。

佐々木 どうかしらんですか？

藤春 やっぱりケンケンだと片方の足だけが異常に疲れる。

佐々木 それはそうでしょうね。

藤春 楓。

佐々木 なに。

藤春 店にサンダルか何かない？

楓 え？ お父さんのでよければバックヤードにあるけど。

藤春 ちよっと借りるよ。

藤春、店の中に入っていく。

楓 ていうか、靴どうしたの？

佐々木 まあ、いろいろありまして。

楓 …佐々木さんだっけ？

佐々木 はい。

楓 よくあんな人と付き合ってたね。
佐々木 え？

楓 何かさ、企んでるの？
佐々木 企んではどういう意味でしょう？

楓 だってさ、妹の私が言うのもなんだけどさ、兄ちゃんは異常にマイペースとか。そういうところがあるから。だいたい、こんな夜中にコンビニの前で練習とかおかしいでしょ。佐々木さん、明日は休みなの？

佐々木 いえ、朝から仕事です。

楓 じゃあ、このまま行くわけ。

佐々木 はい、まあ一度帰ってシャワーは浴びますけど。

楓 よくやるわ。

佐々木 でもそれは私の演技がまだ藤春さんの求めている水準に達してないからで。

楓 まあ、私は演劇のことはよくわかんないんだけど。

佐々木 楓さんってお兄さん思いなんですね。

楓 え？ どこが。

佐々木 いや、さっきから話をしててそう思いました。楓さんはお兄さんがどこか遠くに行ったら悲しいですか？

楓 …何の話？

佐々木 私からもひとつ聞きたいことがあるんです。

楓 なに。

佐々木 四年前の三月のあの日、藤春さんに何かあったんですか？

楓 …。
あの日を境に工場を急に辞めちゃったんで。何かあったのかなって。ずっと気になってたんです。
うーん、それは佐々木さんが直接聞いた方がいいよ。

そこへ藤春、戻って来る。

藤春 おい楓、ないんだけどサンダル。

楓 え、ちゃんと探したの？

藤春 探したよ。どこにあるんだよ。

楓 だからバックヤードに。

藤春 だからバックヤードのどこだよ。一緒に来て探してくれよ。
もう、世話のかかるおっさんだな。

そこへ東口が戻って来る。大きな発泡スチロールの容器を抱えて。

東口 店長。買ってきましたよ。ドライアイス。

楓 おお、よかった。これで何とかなるかも。

藤春 そんなのよく売ってたな、こんな時間に。

東口 ええ、葬儀屋さんが開いてて助かりましたよ。

藤春 え？ 葬儀屋？

東口 国道沿いの。たまたま今晚お通夜が入ってたらしくて。

藤春 ってことはそのドライアイス。

東口 まあ、そういうことです。
佐々木 それでお弁当冷やすんですか？
楓 まあ、何用かはともかくドライアイスはドライアイスだから。
藤春 気分的に検尿のコップでお茶飲みたいな感じだな。
東口 あ、そうそう、停電の原因わかりましたよ。
楓 え？
東口 国道で事故があったんですよ。トラックが電柱に突っ込んで、電柱が倒れて、警察がいつばい来てました。
藤春 何だよ事故かよ。迷惑な話だな。
東口 あのトラックはその大学のトラックでしたね。マークが入ってましたから。
楓 乗ってた人は大丈夫だったの？
東口 それがですね、ドライバーが見当らないらしくて、警察の人が靴を片方しか履いていない男を見かけたら通報してくれて。

全員、懐中電灯で藤春を照らす。

東口 え？ 犯人？

場面転換。

フェリー③

船長の二度目の訪問から数時間後。フェリーの二等船室。
秀人と有紀、救助が来るまで時間を潰している。
麻美、窓から外を眺めてる。

麻美 …ねえ、やっぱりおかしくない？
秀人 何がです？
麻美 海上保安庁の巡視船がこっちに向かってるって言ったのに、あれから何時間たった？
秀人 かれこれ四時間くらいは経ってますね。
麻美 そうよね。遅すぎない？
秀人 まあ、たしかに。
麻美 いや、遅すぎる。あれから何の説明もないし。
有紀 確かにちよっと待ちくたびれましたね。
麻美 それでね。さっきから私、ずっと海を見てたんだけど。この船、確実に流されてるわね。
有紀 え、本当ですか？ わかるんですか？
麻美 太陽との位置関係的に間違いないわね。確実に流されてる。
秀人 それは流されますよ。エンジンを止めてるわけですから。
麻美 でもね、流されるとどうなると思う？
秀人 どうなるんですか？

麻美

浅瀬にでも座礁したら大変なことになるわよ。座礁は船にとって一番こわいなもの。身動きが取れなくなるし、最悪の場合船底に穴が開いて転覆したりするから。転覆したらこれはもう『アタニック』よ、『セイドンアドベンチャー』よ。あの事故で何人死んだと思う？

秀人

それは映画の話でしょ？

麻美

違うのよ、いい？ 秀人君、人間の想像力は時として破局的な疑似体験を欲望するものなの。そしてその疑似体験が現実のものになった時、嘔然とするしかないの。うん、そう、そうなのよ。：私ちよつとどうなってるのか上の様子みてくわ。

秀人

え。

麻美、立ち去る。

秀人

相変わらず落ち着きのない人だな。

有紀

でも、私もちよつと不安になってきた。

秀人

え？

有紀

だってどこに向かって流されてるのかわからないでしょ。

秀人

大丈夫だって。

有紀

何でわかるの。

秀人

もしも危ない状況にあるんだったら、何かしらのアナウンスがあるよ。

有紀

そうかな。

秀人

麻美さんも言ってただろ、パニックになるのが一番よくないって。

有紀

その麻美さんがパニックになってたような気がするんだけど。

秀人

なってたけど、とりあえず俺たちだけでも落ち着こう。

有紀

落ち着いてるよ。

秀人

だったらいいんだけど。

有紀

秀人はやっぱり人を信用してるんだね。

秀人

どういう意味？

有紀

だから何かしらのアナウンスがあるなんて言えるんじゃないの？

秀人

そうなのかな。

有紀

本当は危ない状況なのに隠してるのかもしれないよ。

秀人

それはないと思う。隠して後でばれたらそれこそ問題になるよ。

有紀

本当のことを言ったら、パニックになるからってことはないの？ あの時みたい

秀人

：本当のことって何？

有紀

：わからない。だから不安になるんだと思う。

秀人

そうかもしれないな。

有紀

何が。

秀人

俺はやっぱり人を信用しすぎてるのかも知れないって思ってる。

有紀

：。

秀人

でもさ。俺たちにはわからないだろ。フェリーのこととか、海のこととか。プロじゃないんだから。別に考えることを放棄してるわけじゃないけど、事実そうなんだから。このフェリーを動かしてる人たちはさ、少なくとも俺たちよりは専門性があるわけだし、何よりまだ同じ船に乗ってるんだから、そんな無責任なこと

有紀 秀人の言うこともわかるけど、私は守れるなら自分の身は自分で守りたい。あの子のことも。

秀人 ……
有紀 ねえ、もう一回聞いていい？
秀人 なに？

有紀 大阪で、私たちと一緒に暮らさない？
秀人 だからそれは無理だって。

有紀 何で？
秀人 だから仕事があるから。俺は俺なりに責任を果たしたいと思ってるんだよ。
有紀 何の責任？

秀人 未来に対する責任、かな。エンジンアとしての。俺の世代では無理でも、後の誰かが問題を解決してくれるかもしれない。それまでは何としてでもバトンを繋がないと。

と、そこへ船長がやって来る。船長はオレンジ色の救命胴衣を二つ、二重に着用している。

船長 あの。
秀人 はい。

船長 ここですよね。
秀人 何がですか？

船長 さっきから船内をウロウロされているお客様のお部屋は。
秀人 あ、はい。
船長 困るんですよ。ちゃんと船室で待機して頂かないと。

有紀 はい、すみません。言っておきます。
有紀 お願いしますよ。
有紀 あの。

船長 何ですか？
有紀 救助はいつ来るんですか？
船長 もうすぐ来ますよ。ご安心ください。

船長 この船、流されてるってきいたんですけど。
有紀 いいですか、奥さん。大丈夫です。この船は今、アンカーを下ろしてますから流されるということはありません。それにですね、万が一、まあこれは万が一の話ですが、たとえ流されていっても、ここは沖合です。座礁などの心配は絶対ありません。それにですね、万が一、まあこれは万が一の話ですが、たまたま浅瀬があったとして、この船が座礁したとしましょう。それでも沈没などの心配はありません。というのはこの型の船は別名、海のスタンハンセンと呼ばれておりましてね。つまり不沈艦です。何があるうと沈まない。そういう構造になってるんです。たとえ潜水艦から魚雷を受けたとしても沈みません。まあこれは冗談ですが。さすがに魚雷を受けたら沈んじやいます。要するにそれくらい想定外の事故に遭わない限りは安全ということ。よろしいですか？
有紀 はあ。

有紀

船長
ご心配なく、事故は確実に収束に向かっています。アンダーコントロールですよ、奥さん。アンダーコントロール。それでは失礼します。

船長、立ち去る。

秀人
：あれだけ安全を強調されると余計に不安になってくるな。
有紀
うん。

秀人
麻美さんがいなくてよかったよ。

有紀
私、何だか気分が悪くなってきた。

秀人
え？

有紀
あの人の話聞いてたら。

有紀、ハンカチで口を押える。

秀人
大丈夫？

有紀
ねえ、トイレくらい行ってもいいよね。

秀人
ああ、いいと思うけど。

有紀、立ち去る。秀人、有紀を見送る。

秀人
：ん？ ん？

秀人、船室の入り口のちよつとした隙間で何かを拾う。

秀人
何これ。

そこへ麻美が戻って来る。

麻美
失礼しちゃうわ。何なのよもう。

秀人
どうしたんですか？

麻美
救助はもうすぐ来るの一点張り、何も教えてくれないのよ。これはあれじゃな
いかしら。隠ぺいじゃないかしら、そうよ、隠ぺいよ。情報封鎖よ。挙句の果て
に船室に戻れて、人をクレーマー扱いして、ほんと失礼しちゃうわ。

秀人
麻美さん。
なに？

秀人
麻美さんのですか？ この指輪。

麻美
え？

秀人
その入り口の隙間に落ちてたんですけど。

麻美
：私のじゃないけど。

秀人
そうですか。でもこれどう見ても女物ですよ。

麻美
しかもけっこういい石が入ってるわよこれ。

秀人
有紀こんなの持ってたかな。他にこの部屋に誰か来ました？

麻美
私たち以外には、あの船長さんくらいしか。あ！

秀人
どうしたんですか？ 何か心当たりでも？

麻美 いえ、別に。
秀人 そうですか。上に届けた方がいいですかね、落し物ですって。
麻美 いや、それはやめた方がいいんじゃないかしら。
秀人 どうしてですか？

そこへ、正夫がやって来る。

正夫 ……どうしよう、どうしよう、どうしよう。
秀人 あ、正夫さん、これ正夫さんのじゃないですよね。
正夫 え？
秀人 女物ですからね。やっぱり有紀のかな。
正夫 ええっ？ どこに落ちてたの？
秀人 その入り口の隙間に。
正夫 うそ。
秀人 ほんとですよ。え、これ正夫さんのですか？
正夫 え、あ、いや。
秀人 そうですよ。違いますよね。
正夫 いや、あの、その。
秀人 後で有紀に聞いてみます。

正夫、秀人の手にしている指輪を掴む。

秀人 何ですか？
正夫 俺の。
秀人 え？
正夫 これ俺のなんだよ。

正夫、指輪を奪い取る。

秀人 でもそれ、女ものですよ。
正夫 こうなったら仕方ない。麻美さん。

正夫、麻美の方を見る。麻美、身構える。

麻美 は、はい。
秀人 え？
正夫 もしよろしければ、これ、受け取ってもらえませんか？ 僕はもう後悔したくないんです。

正夫、指輪を手に麻美の前に跪く。

秀人 ええっ？

そこへ有紀が慌てて戻って来る。

有紀　ちよっと、大変なことになってるよ。
秀人　こっちもまあまあ大変なことになってるんだけど、なに？
有紀　東京が、火の海になってる。
秀人　え？

場面転換。

深い海の底の国

深い海の底の国。

乙姫が男1の耳掃除をしている。

男1　…うわ！
乙姫　ちよっと、危ないでしょ。
男1　ごめんごめん。
乙姫　鼓膜やぶれるよ。
男1　いや、ちよっとウトウトしてた。あー、びっくりした。
乙姫　どうしたの？
男1　何かさ、夢をみたよ。
乙姫　夢？
男1　その夢の中で、俺は船に乗っててさ、医者なんだよ。その船には兵隊が沢山乗ってた。たくさん。それが、魚雷を受けて、沈む夢。
乙姫　…。
男1　何でこんな夢見たんだろ。
乙姫　それよりも、ほら、見て見て、こんな大きな耳クソとれたよ。こんなのが詰まってるよ。今まで聞こえてたよね。
男1　そうか、思い出した。
乙姫　え？
男1　俺はその船に乗ってたんだ。帰る途中だったんだ。それが船を沈められて。
乙姫　それより、この耳クソどうしょっか。
男1　思い出したよ。
乙姫　こんなに大きいんだから、記念にとっておく？
男1　帰らないと。
乙姫　俺、帰らないと。
男1　帰るってどこに？
乙姫　それはわからないけど、待っている人がいるんだ。それは確かなんだ。そもそも、ここはどこなんだ？　俺はどうやってここに来たんだ？
男1　…そう。
乙姫　お前、何か知っているのか？
男1　いつか。

男1 いくつか？
乙姫 いくつかこの日が来るとは思っていました。思い出してしまっただけですね。

男1 まだ曖昧なんだよ。教えてくれ。

乙姫 ここは深い海の底の国。

男1 深い海の底？

乙姫 あなたのおっしゃった通りです。あなたは昔、この南の海で船に乗っていました。その船が沈められて、それを私が助けたのです。

男1 どうして？

乙姫 好みのタイプだったから。

男1 そうか。そうだったのか。

乙姫 亀の亀次郎。ここへ。

乙姫が呼ぶと海の古強者、亀の亀次郎がやって来る。

亀次郎 お呼びですか姫様。

乙姫 亀次郎、この人を送ってさし上げなさい。

亀次郎 え、でも、いいんですかい？

乙姫 いいんです！ これは定め。二人が出会った時から決まっていたことなの。

亀次郎 わかりやした。この亀の亀次郎、命に代えてもこの人を故郷に送り届けてみせや
す。

乙姫 あなたにお渡しするものがあります。

乙姫、黒い箱を持ってくる。

乙姫 これをお持ちになってください。

男1 何だいこれは？

乙姫 お土産的なものです。

男1 お土産的なもの？

乙姫 この箱の中身もあなたと同じように帰りたいがっているんです。もしよろしければ
一緒に連れて帰ってあげてください。

男1 …わかった。

男1、玉手箱を受け取る。

乙姫 これでお別れなんですネ。

男1 うん、でも幸せだったよ、ほんと。ここでの生活は。鯛や平目の舞い踊り、そし
て君と過ごした日々。一生忘れないよ。
さようなら。

乙姫

男1、亀次郎の背中に乗る。

麻美

(モノローグ) こうして男は亀次郎の背中に揺られ深い海の底の国を後にし、故郷
の島に向かった。ところがである。海面に出た途端、まばゆい光と凄まじい衝撃
波が。

亀次郎 危ない兄貴。

麻美 亀次郎はその甲羅で光と衝撃波から男をかばう。

凄まじい光と衝撃波。

男1 今のは一体？ はっ、亀次郎、大丈夫か？

亀次郎 すいやせん、兄貴、あっしはここまでのようです。

亀次郎、息絶える。

男1 亀次郎？ 亀次郎ー！

麻美 移動手段を失った男は、波間に揺れながら途方に暮れるしかなかった。とそこへ、

運良くマグロ漁船が通りかかる。

漁師 兄ちゃん、乗ってくかい？

こうして男は無事、故郷の島に帰ることが出来た。ところがである、戻ってみると故郷はすっかり様変わりしていた。男を覚えている者は誰もいなかった。いつの間にか数十年の月日が経っていたのだ。途方に暮れた男は思い出した。あの黒い箱のことを。男は人気のない海辺で箱を開けてみることにした。

男1、黒い箱を開けてみる。

麻美 すると、中から何万という、海の底に沈んでいた人々の魂が溢れだす。

男1、中から何かをつまみあげる。それはどうやらチャックのようだ。

男1 何だこれ？ チャック？

音楽 『ゴジラ』のメインテーマ。

麻美 男の体はみるみる膨れ上がり、天をもつく大きさに。

暗闇。静寂。

麻美 一方その頃、ゴドージラ出現を受け、関東圏には厳重な計画停電が実行されていた。水爆実験の記憶によりゴドージラは光を憎悪し向かっていく性質があるのだ。そしてお台場沖に現れたゴドージラは、航空自衛隊の照明弾投下によって、巧みに東京湾の外へと誘導されていく。人類の智慧の勝利かと思われた。しかし、その計画停電に反旗を翻した一派がいた。とあるコンビニエンスストアチーンだ。他の店が営業していない今こそ稼ぎ時だと考えたのか、何千という店舗が一斉に営業を再開したのだ。

街に次々と明かりが灯る。そこには巨大化した男1／ゴドージラの姿が。

麻美 突如、出現した眩い蛍光灯の銀河により、たちまち誘導作戦は失敗、ゴドージラは踵を返して竹芝栈橋に上陸。それを阻止せんとする自衛隊は蹴散らされ、たちまち東京は火の海になるのであった。

帰る場所を探して彷徨うゴドージラ。火の海になる東京。

麻美 とそこへ、空の彼方から、一筋の光がゴドージラに向かっていく。

音楽 『鏢腕アトム』のアトムマーチ。

ゴドージラと比べて非常に小さな飛行物体(アトム)が飛んでくる。

アトム やめろー！

アトム、旋回してゴドージラに向かっていく。
が、ゴドージラにあっさり叩き落とされる。

アトム うわああああー。

場面転換

お茶の水博士とアトム

千葉県某所。お茶の水博士のラボ。

アトムがメカニカルなベットの上に横たわっている。

お茶の水博士が巨大なコンピュータを操作している。

アトム …うわ！

アトム、突然起き上る。

博士 よかった、アトム、気がついたみたいだね。

アトム お茶の水博士、ここは？

博士 千葉県にある私のラボだよ。

アトム ということは、僕は負けたんですか。ゴドージラに。

博士 ああ、負けたよ。

アトム そうですか。すみません。

博士 君はやれるだけのことはやったんだ。気にすることはないんだよ。

アトム ゴドージラは？ 今どこに？ 浜松町の防衛線は？

博士 浜松町の防衛線は突破されたよ。今は銀座で自衛隊と交戦中だ。

アトム こうしちゃいられない。

アトム、立ち上がろうとするが。

アトム うっ。

アトム、崩れ落ちる。

博士 無理をしちゃいけない。君の心臓の格納容器にはゴドージラの二撃で相当のダメージが残ってる。いつガタがきてもおかしくないんだよ。

アトム でも、僕が戦わないと。

博士 何故君が戦う必要がある？ 自衛隊に任せておけばいいじゃないか。いいかい？ 確かに君には力がある。でもその力は平和の為に使うべきものなんだ。血なまぐさい戦いの為に使うものじゃない。

アトム いえ、違うんです博士、ゴドージラと戦ってわかったことがあるんです。僕とゴドージラは同じなんです。

博士 同じ？

アトム 同じように人間の手によって生み出され、同じようにとてつもない大きな力を持っている。

博士 君はゴドージラとは違う。君は平和の為に、

アトム おっしゃることはわかります。でも僕が光ならあいつは闇、兄弟といってもいい。

ゴドージラを止められるのは僕だけなんです。

博士 …そこまで言うのなら、止めやしない。でも君はゴドージラに勝てんよ。

アトム どうしてですか？

博士 スペックが違うんだ。

アトム スペックが？

博士 ああ、そうさ。君はそもそも平和利用の為に作られた。だからいくら力があるといっても限界がある。ところがゴドージラにはそれがないんだ。あれは荒ぶる神だよ。人間がどうこうできる存在じゃないんだ。

アトム 畜生、ゴドージラに弱点はないんですか。

博士 なくはない。

アトム え、あるんですか？

博士 君は敗れはしたがあの戦いは無駄ではなかったんだ。貴重なデータが取れたからね。見てくれ。

お茶の水博士、巨大なコンピュータを操作する。

博士 ゴドージラの背中には何故かチャックがあるんだ。

アトム チャックが？

博士 多角的な分析の結果、このチャックを下ろすことができれば、あるいは。

アトム ゴドージラに勝てるんですね？

博士 だが何度も言っているように君とあいつではスペックが違うんだ。近寄ることすらできないよ。

アトム そんなのやってみないとわかりません。

博士 それに君の心臓の格納容器は既に限界にきている。

アトム 博士、僕は知ってるんですよ。この千葉県に僕の心臓のスペアがあるって。しかも最新式のね。

博士 アトム、どうしてそれを？
アトム あれを僕に移植してください。
博士 いかん、いかんぞ、そんな危険なことは容認できん。それにあれがなくなれば千葉県
の電気がまかなえなくなる。
アトム どちらにせよ、関東全域は計画停電の最中ですよ。
博士 駄目なのは駄目だ、そもそも前例がない。
アトム 博士、お願いします。僕にもう一度チャンスをください。ゴドージラを止められるのは僕だけなんです。あいつを止めてやりたいんです。

場面転換。

ゴドーを待ちながら③

真夜中。未だ停電中のコンビニの前。
藤春、一人でゴドーを待ちながらの稽古をしている。
楓はそれを見ている。

藤春 さあ、もう行こう。だめだよ。なぜさ。ゴドーを待つんだ。ああ、そうか。しかも来てもいいはずだがな。確かに来ると言ったわけじゃない。じゃあ、来なかつたら？ 明日、もう一度来てみるさ。それから明後日もな。そりゃあそうさ。ねえ。あのさ。
楓 なに？ 今いいところなのに。
藤春 兄ちゃんさ、今、バイトしてないんだよね。
楓 だから言っただろ、この公演の為にやめたんだよ。創作に集中したいからな。
藤春 公演が終わったらどうするの？
楓 また、新しいバイト探すよ。
藤春 ねえ、うちで働かない？
楓 だからそれは嫌だって言ってるだろ。
藤春 何で。
楓 だから、お前とかあのバイトの下で働きたくないからだよ。
楓 店長としてだったら？
楓 はあ？
楓 店長としてこの店で働いてみない？
楓 店長はお前だろ。
藤春 実はさ、近々もう一店舗だそうと思ってるの。その大学がキャンパスをリニューアルするんだって。ほら、今、ロボット関係でマスコミに引っ張りだこでしょ。それで志願者がうなぎ上りなんだって。この少子化の時代に結構なことだよ。で、それとうちの店とどう関係があるんだよ。
楓 鈍いなあ、だからそのキャンパスに出店するの。うちのコンビニが。
藤春 ああ、そういうことか。

楓　　そういう話があつてね。うちとしてはかなりの冒険なんだけど、この店、お客さんのほとんどが大学関係の人でしょ。だからもし他のチェーンが入るとかなりの痛手なわけよ。背に腹は代えられないっつーか。
なるほどな。

楓　　その大学の店舗は私が仕切るつもりだから。今、この店を任せる人探してるってわけ。

藤春　でも何で俺なんだよ。

楓　　うちはさ、地元の酒屋から出発してるし、地域密着というか。やっぱり家族経営が基本だと思ふんだよね。

藤春　それだけか？

楓　　後はまあ、お父さんとお母さんも安心させたいし。やっぱりな。

藤春　でも二人ともほんと心配してるからさ。兄ちゃんのこと。

楓　　お前はほんと家族思いなやつだなあ。

藤春　でも悪い話じゃないでしょ。店長だよ、店長。

楓　　店長か、確かに魅力的な響きだな。じゃあ。

藤春　だが断る。その申し出、断固として断るぞ、俺は。何で。

藤春　：余計なお世話なんだよ。だいたい俺は知ってるぜ。コンビニの店長なんて忙しくて大変なだけで大して給料もよくないってな。

そこへ、佐々木がトイレから戻って来る。

藤春　ま、そういうことだから。

楓　　：言っとくけどいつまでも私が優しいと思つてたら大間違いだからね。

楓、立ち去る。

佐々木　どうかしたんですか？

藤春　いや、別に。

佐々木　じゃあ続きやります？

藤春　いや、今日はもうこれくらいにしておこう。

佐々木　そうですか。

藤春　佐々木さん明日仕事でしょ。

佐々木　ええ、まあ。

藤春　続きはまた明日の夜。まあ何とかなるよ。

佐々木　何とかありませんかね。

二人、懐中電灯を消す。あたりは真っ暗。

佐々木　懐中電灯消すとほんと真っ暗になりますね。

藤春　うん。

佐々木　ちよっと前にもこんなことありましたよね。

藤春 え？

佐々木 四年前の三月に。

藤春 そういえばあったかな。

佐々木 藤春さん。

藤春 なに。

佐々木 最後にひとつだけ質問いいですか？

藤春 なに。

佐々木 あれは、あの日に起こった出来事は、藤春さんにとってデカイ一発じゃなかったんですか？

藤春 …。

佐々木 ゴドーはもう来てるんじゃないですか？

藤春

佐々木 佐々木さんがさ、いつのことをあの日って言うてるか、俺には正確にはわかんないんだけど、もし同じ日のことを考えてるんだったら、あれは俺にとってノーカウントなんだよ。

佐々木 ノーカウント？

藤春 あの日、確かに俺はデカイ一発が来たと思ったよ。この日常が引っくり返るようなデカイ一発が。それで俺はどうしたと思う？

佐々木 …。

藤春

告白しに行ったんだよ。昔好きだった女の子のところに。後悔しなくなかったから。このまま世の中が滅茶苦茶になって、そのドサクサでもしかしたら俺は死ぬかもしれない。だったらこれだけはやっておきたい。そう思ったんだよ。有紀ちゃんっていう、昔このコンビニでバイトしてた子だったんだけど。俺も一緒にオーピングスタッフで働いてて、で、家まで会いに行ったらさ、そしたら通報されちゃって。まあ、面と向かって話すのは十年ぶりくらいだったからなあ。無理もないんだけど。

佐々木 …。

藤春

でも俺がびっくりしたのはその後でさ、何も変わらなかったんだよ。あれだけのことが起きたのにさ。有紀ちゃんが被害届を出さなかったから嚴重注意で済んだってのもあったんだけど。気が付いたら何事もなかったかのように元の生活に戻ってたんだよ。これって何なんだろうね。

佐々木 だから今でも待ってるんですか？

藤春 どうなんだろう。やっぱり今でも待ってるのかなあ、俺は。

佐々木 待っても来ませんよ。

藤春 え？

佐々木

もうたぶん、もう来ませんよ。どれだけ待っても。藤春さんの言葉を借りればこの終わりのなき日常がずっと続いていくんですよ。私も思ってたんです。あの日、もしかするとこれで何もかも変わるんじゃないかって。でも何も変わりませんでした。ほんとに何も変わらなかった。だから私思ってたんです。自分でデカイ一発を起こしてみようって。…実はもう起こしちゃってるんですけどね。

藤春

佐々木はずっと肌身離さず背負っていたリュックサックを示して。

佐々木

この鞆の中にはお金が入ってるんです。四千万円。工場のお金です。横領したん

です。ばれないように四年間少しづつ少しづつ。でももうすぐばれます。担当が変わることになって。だから近いうちに外国にでも逃げようと思ってます。どこか南の島がいいなと思ってるんですけど。

藤春 ……
佐々木 ねえ、藤春さんも一緒に行きませんか？

藤春 え？

佐々木 南の島。

藤春 何で？

佐々木 何がですか？

藤春 何で俺？

佐々木 たまたまです。

藤春 たまたま？

佐々木

たまたま駅前の居酒屋で会ったから。あ、そうそう、昔藤春さんのお芝居みて感動したっていう話、ごめんなさい、あれは嘘です。本当は全然、面白くなかったです。

藤春 ……

佐々木 傷つきました？

藤春 いや、酷評されるのは慣れてるから。

佐々木 でも、この人は私と同じだなんて思いました。これは本当です。

藤春 同じ？

佐々木 私と同じで、ズーっと待ってた人なんだなって。

藤春 ……

佐々木 今すぐ決めなくていいですよ。明日、もう一度ここで会いましょう。その時まで決めておいてください。

藤春 ……いや、俺はいいわ。

佐々木 え？

藤春 そういうのじゃないんだよ。

佐々木 そうなの？

藤春 何かうまく言えないんだけど、なんか、ごめんな。

佐々木 ……そうですか。

藤春 うん。

佐々木 残念です。

藤春 あ、でも何か誘ってくれたことは嬉しかったよ。うん。

佐々木 嘘ですよ。

藤春 え。

佐々木 うそうそ、全部ウソ。私が横領なんてするわけないじゃないですか。

藤春 ……あ、ああ、そうなんだ。びっくりした。

佐々木 信じました？

藤春 ま、まあ、だって何かマジだったからさ。あーびっくりした。

佐々木 私、いい役者になれますかね。

藤春 ああ、うん。それはもう俺が保証するよ。

佐々木 あーあ。

佐々木、夜空を見上げて。

佐々木 ほんとう星が綺麗ですね。
藤春 え、ああ、うん。

場面転換。

フェリー④

正夫のプロポーズから数時間後。深夜。フェリーの二等船室。汽笛の音。
麻美、プロットを考えている。有紀、窓の外を見ている。

麻美 …有紀ちゃん。
有紀 はい。
麻美 できた。
有紀 はい？
麻美 やっと出来た。
有紀 何がですか？
麻美 映画のプロット。
有紀 ああ。
麻美 ああじゃなくて、何か言うことない？
有紀 言うこと？
麻美 お疲れ様です、とか、よく頑張りましたね、とか。
有紀 お疲れ様です。よく頑張りましたね。
麻美 うん、時間はたっぷりあったからね。
有紀 そうですね。
麻美 今何時？
有紀 もう十二時回ってますね。
麻美 え、もうそんな時間なの。
有紀 はい。

麻美、立ち上がって窓際へ。

麻美 海上保安庁の船は？
有紀 さっき戻ってきましたよ。
麻美 じゃあそろそろ次は私たちの番かな。
有紀 だといんですけど。
麻美 でも街の明かりが見えるとほっとするわね。一時はどうなることかと思ったけど。
有紀 そうですね。
麻美 それでね、有紀ちゃんに、謝らないといけないことがあるの。
有紀 なんですか？
麻美 プロットに有紀ちゃんから聞いた話、使っちゃったのよね。
有紀 話？

麻美 ほんら、藤春っていう、昔のバイト先の先輩が急に押しかけて来た話。
有紀 ああ。
麻美 私、その人の気持ち少しだけわかるのよね。何か大きなことが起こった時、ふだんは気づかない気持ちに気づいちゃうことって、あるのよ。

麻美、指にはめた指輪を見る。

麻美 有紀ちゃんには迷惑だったのかもしれないけど。
有紀 うーん、今から考えたら悪いことしちゃったかなって思います。あの時は子供もいたし、びっくりして通報しちゃったんですけれど。
麻美 そうよ。その藤春って人は、十年間もずっと有紀ちゃんのことを想い続けてたってことなんだから。
有紀 十年か。いやー、やっぱり気持ち悪いですね。
麻美 そう？ ロマンスにならない？
有紀 なりませんね。
麻美 そっか。プロット、再考の余地ありか。

そこへ秀人がやって来る。

秀人 船、戻って来たみたいですよ。
有紀 うん、私たちもここから見てた。
秀人 それにしても東京が火の海になってなくてよかったですよね。
麻美 ああ、そうね。
有紀 すみません、何か変なこと言っちゃってしまっただけ動揺してたのよね。
麻美 それだけ動揺してたのよね。
有紀 穴があったら入りたいです。
麻美 こんな時にロボットのテレビでそんな紛らわしい映画流さなくてもね。
有紀 秀人こそどうだったの？
秀人 何が？
有紀 トラブル、上ですと電話してたでしょ。
秀人 ああ、それがいくら聞いてもよくわかんないんだよね。同僚がロボットを持ち出そうとして事故を起こしたらしいんだけど。
麻美 事故？
秀人 トラックで電柱にぶつかったらしいんですけど。何でそんなことしたのか。
麻美 あ。
秀人 何ですか？
麻美 もしかしてスパイじゃない？ 産業スパイ。
秀人 え、いや、あの人に限ってそれはありませんよ。お茶の水博士って仇名がつくくらいにロボット馬鹿ですから。
麻美 とそこへ正夫がやって来る。

正夫 そろそろ、僕たちも上に集まった方がいいみたいですよ。
麻美 はーい。

秀人　とにかく詳しいことは帰ってみたいとわかりませんね。
正夫　忘れ物のないようにしないと。
秀人　救命胴衣はつけなくていいんですか？
正夫　上で配ってたよ。
麻美　長い帰り道になったよね、ほんと。
有紀　そうですね。
麻美　そうそう、みんな、これよかったら持って帰って。水。
秀人　え？
麻美　お土産に。

麻美、ミネラルウォーターを配り始める。

秀人　いや、いいですよ。
麻美　遠慮しなくていいから。ね。
秀人　いえ、ほんとにいららないで。荷物になるだけですから。
麻美　いいのいいの。

麻美、強引に秀人にミネラルウォーターを渡す。

秀人　いいのいいのって、麻美さん、重いから持って帰りたくないだけでしょ。
麻美　有紀ちゃんにも、これ、この事件の記念に。
有紀　ありがとうございます。

麻美、強引に有紀にもミネラルウォーターを渡す。

秀人　ちよっと、荷物になるだけですから。
麻美　けち臭いこといわないの、私なんかまだこの中に十本以上入ってるのよ。ちよつと買わずにさあ、行きますよ。
正夫　いえ。

正夫、水の入った麻美の鞆を持つ。

正夫　ひとつと言わず、全部頂きますよ。
麻美　まあ、素敵。
正夫　さあ、行きますよ。
麻美　はい。

正夫と麻美、立ち去る。

秀人　…ごめんな、荷物増やして。
有紀　うん、悪気はないと信じる。

秀人と有紀、鞆にミネラルウォーターを入れる。

有紀 あ、そうそう、秀人。
秀人 なに。
有紀 これ。忘れないうちに渡しとくね。

有紀、茶色い封筒を差し出す。

有紀 東京着いたから。

秀人 …受け取らないと駄目？

有紀 用意したのは秀人でしょ？

秀人 そうだけど。

有紀 じゃあ何で渡したの？

秀人 まあ、けじめとして。

有紀 何のけじめ？

秀人 だって俺たちはさ、もう修復不可能なんだろう？

有紀 誰がそんなこと決めたの。

秀人 誰も決めてないけど。

有紀 じゃあ、もう一回聞いていい？

秀人 なに？

有紀 大阪で、私たちと一緒に暮らない？

秀人 だからそれは無理だって。

有紀 何で？

秀人 だから仕事があるから。

有紀 だよね。

秀人 うん。

有紀 わかっているんだけどね。

秀人 …。

有紀 このやりとり、何回したかな。

秀人 何回もしたな。

有紀 でもこれで最後にしよう。

秀人 …わかった。

秀人、離婚届けを受け取る。

秀人

俺さ、このフェリーが事故って止まった時、少し嬉しかったんだよね。できれば、このままずっと東京に着かなければいいのにつて。もしかしたら、何か変わるチャンスなのかなって思ってたんだけど。

有紀

…何も変わらなかったのかな。

そこへ、麻美がやって来る。救命胴衣を着けている。

麻美

何してるの。早く、行くよ。

秀人

…あ、はい。

麻美

どうしたの？

秀人

いえ、何でもないです。

麻美 あ、そうだ、有紀ちゃん、本、『ゴドーを待ちながら』
有紀 あ、すみません、忘れてました。
麻美 読めた？

有紀 いえ、それがまだ、すみません私本読むの遅くて。
麻美 あ、そうなんだ、じゃあ貸しとくわ。
有紀 え？

麻美 まだ最後まで読んでないでしょ？
有紀 でも、

麻美 いいのいいの、私もう読んだから。そうね、私たちの結婚式の時にも返してく
れたらいいから。親戚っていつてもそういう時にしか会えないしね。

有紀 え？ もうそこまで話進んでるんですか？

麻美 来年の春、予約してるらしいのよ。

秀人 見切り発車も甚だしいですね。

麻美 そうなの。あの人とにかく強引なのよね。まあそういうところ嫌いじゃないんだ
けど。

秀人 はあ。

麻美 とにかく二人とも早く、上でみんな待ってるから。

麻美、立ち去る。

秀人 ……よかったな。最後まで読めるよ。

有紀 うん、全然読みたくないんだけど。

秀人 さでと、俺たちも行くか。

有紀 うん。

秀人と有紀、立ち去る。

場面転換。

アトムとゴドージラ

麻美

(モノログ) 銀座の防衛線を突破したゴドージラの進撃は、何故か皇居を大きく迂回し、九段坂の上にある、とある神社の前で突如停止した。と、そこへ空を越えて、ラララ、科学の子、アトムが現れる。最新式の核融合炉を搭載したアトムはゴドージラの背後に回ると、音速の三倍の速度で突っ込んだ。このやりとりはその刹那、ゼロコンマ、000000001秒の間に交わされたものである。

空が茜色に染まった夕刻。九段坂の上にある、とある神社。

老人(ゴドージラ)が一人、佇んでいる。そこへ、若者(アトム)がやって来る。

アトム ……あの。

ゴドー はい？

アトム あ、いえ。

ゴドー 何ですか？

アトム さっきからずっとここにいらっしやいますよね。

ゴドー ああ。邪魔ですか？

アトム いえ、そういうわけじゃないんですけど。

ゴドー すみません。

アトム いえ。どうかされたんですか？

ゴドー …わからないんです。

アトム え？

ゴドー 帰るところが。

アトム どういうことですか？

ゴドー

私はずっと長い間、遠いところにいたんですよ。長い間、遠いところに。でも大事なことを思い出したんです。私を待っている人がいるって。それで久しぶりに帰ってきたんですけど。わからないんですよ。自分の帰るところが。そもそも一体誰が私を待っていたのが。

アトム ああ、このあたりもずいぶん変わりましたからね。

ゴドー そうなんです。

アトム よろしければ、一緒にお探ししましょうか？

ゴドー え？

アトム 地図か何かお持ちですか？ 手がかりは？

ゴドー それは何もないんですよ。

アトム 隙あり！

アトムはゴドージラの背後に飛びかかる。

ゴドー ああっ！

アトムはゴドージラの背中にあるチャックを掴む。

ゴドージラは一歩も動けない。

ゴドー 何をするんですか？

ゴドージラさん、あなたの気持ちもわかります。でもだからって、町をこんな風に目茶目茶にしていい理由にはならないんですよ。あなたが踏みつけたその足の下には何の罪もない人々が暮らしていたんです。

ゴドー え？

ゴドージラは恐る恐る足を上げてみる。そこには火の海になった街が。

アトム 見えましたか？ あなたの踏みつけたものが。

ゴドー 見えました。でも仕方なかったんです。仕方なかったんですよ。私は家に帰りたかっただけなんです。

アトム だから帰りましょう。僕も一緒に行きますよ。

ゴドー 駄目です。放してください。

アトム
いいえ、放しません。僕の体ももうこれ以上はもちません。最後の力を振り絞ってこのチャックを下ろします。
ゴドー
いけません。そのチャックを下ろしてはいけません。
アトム
大丈夫です。もういいんです。もういいんですよ、ゴドージラさん。もう休みましょう。僕もあなたも。それがこの国に住む人たちのためなんです。

アトム、チャックを下ろす。
ゴドージラ、咆哮す。

暗転。

場面転換。

エピソード

フェリーの漂流事件から半年と少し。
朝。千葉県にあるとあるコンビニエンスストア。その駐車場。
コンビニの制服を着た藤春と東口が話をしている。
藤春、缶コーヒを飲みながら座りくつろいでいる。
東口は箸とちりとりを持って立っている。
少し離れたところに、つばの広い帽子とサングラスの麻美が立っている。

藤春
それでね、次の日、来なかったんだよね。その次の日も、その次の日も。

東口
誰が？

藤春
だから、佐々木さんが。

東口
佐々木さんって？

藤春
だから、昔のバイト先の同僚の。ここで一緒に稽古してた。

東口
ああ、そういえばいたね、そんな人。

藤春
本番二日前だよ。連絡もつかないし。どうしたと思う？ しょうがないから、

一人でやったんだよ、一人でウラジールとエストラゴンを。まあ、あれは俺だからできた、天才だけに許される最後の手段だったね。うん。

東口
：ふーんなるほど、で、今君はここで何してんの？

藤春
え？ 休憩だよ、休憩。

東口
休憩？

藤春
うん。

東口
誰が休憩していいって言った？

藤春
え？

東口
掃除は？ 何勝手に休んでんの？

藤春
：ちっ、うっせーな。

そこへ、楓がやって来る。

東口 楓 おはよう。
東口 楓 あ、おはようございます。
東口 楓 やってるね、調子はどう？
東口 楓 おい、楓、話が違っちゃねーかよ。
東口 楓 なにが？
東口 楓 何で俺がバイトでこいつが店長なんだよ。
東口 楓 仕方ないじゃない、今は彼の方が適任なんだから。
東口 楓 あの家業経営の話はどこに行ったんだよ。
東口 楓 ブランクがあるんだから、わかんないことも多いでしょ。
東口 楓 そうだけど、だいたいコンビニでできることが増え過ぎなんだよ。こっちの身にもなってほしいよ。
東口 楓 でしょ、イチから覚えなおさないと。
東口 楓 というわけで、バイト君、掃除。
東口 楓 ……はいはい。

藤春、掃除用具を受け取る。

東口 楓 じゃあ店の前から。
藤春 はいはい。
東口 藤春 丁寧だね。
藤春 覚えてるよ、いつかてっぺんとしてやるからな。

藤春、立ち去る。

東口 楓 相変わらずみたいね。
東口 楓 そうなんですよ。
東口 楓 今から出勤ですか？
東口 楓 そうなのよ。
東口 楓 で、どうですか？ 新店舗の方は。
東口 楓 うん、それが怖いくらい順調。まあ、もともと勝ち戦だとは思ってたんだけど、ここまでとはね。今日も何か新しいロボットのお披露目があるとかでね、忙しくなりそうなのよ。それじゃあ、この店はお願ひね。
東口 楓 はい。
東口 楓 いろいろ大変だと思うけど。
東口 楓 まかせてください。

楓、立ち去る。東口、見送る。

東口 さとと。
東口 東口、立ち去る。麻美、一人になる。
東口 東口、やって来る。

秀人 お待たせしました。場所、すぐにわかりました？
麻美 ええ。お久しぶり。
秀人 お久しぶりです。今日は見学のお申込み、ありがとうございます。
麻美 いえいえ、こちらこそ、急に無理言いました。
秀人 いや、まさか麻美さんから申し込みがあるなんて思いませんでしたよ。取材ですか？
麻美 ちょっと、次回作のね。
秀人 実は今日、試験走行の日なんです。ちょうどいい日に来ましたよ。
麻美 そうなの。
秀人 はい。
麻美 いい取材になりそうね。どんなロボットなのか楽しみ。
秀人 見ます？ ちょっとフライングになりますけど、待ち受けにしているんですよ。
麻美 え、みせてみせて。

秀人、携帯の待ち受け画面を見せる。

秀人 どうですか？
麻美 うーん、何か違う。
秀人 え？
麻美 これほんとにロボット？
秀人 そうですよ。
麻美 足がないじゃない。
秀人 足なんて飾りですよ。そもそも、災害救助や瓦礫撤去のためのロボットですからね。それにね、無限軌道は男のロマンなんです。
麻美 うーん、何かイメージと違うのよね。

そこへ有紀がやって来る。

有紀 おはようございます。
麻美 ……え？
有紀 どうも、お久しぶりです。
麻美 え？ 有紀ちゃん、何で？
有紀 ご一緒していいですか？
麻美 ……あなたたち、あれしたって聞いたけど。
秀人 何ですかあれって。
麻美 あれはあれでしょ。
秀人 ま、たしかにあれしましたけど。
有紀 いいですよ。はっきり離婚って言うってもらっても。
麻美 ちよっとちよっと、あえてぼかして言うてるのに。
有紀 元旦那の仕事に興味持っちゃだめですか？
麻美 だめってことはないけど。
有紀 あ、あと、これ返そうと思って来たのもあるんです。

有紀、本を取り出す

有紀 ゴドーを待ちながら。結婚式、行けませんでしたから。
麻美 そんなのいいのに。
有紀 いやでも実はですね、来る途中の新幹線で読んでたんですけど、まだ最後まで読めてなくて、まだゴドーが出てきてないんですよ。
麻美 え？
有紀 あと数ページなので、もう少し待ってもらっていいですか？
麻美 うん、まあ待つけど。
秀人 そろそろ時間ですね。さあ、行きましょうか。
麻美 はい。

三人、立ち去る。
そこへ藤春が戻って来る。三人を見送って。

藤春 さあ、行こう。ダメだよ。何故さ。ゴドーを待った。…いや、もう待たなくていい。

おしまい

参考文献 『ゴドーを待ちながら』サミュエル・ベケット 安堂信也 高橋康也 訳(白水社)

参考文献 引用・参考箇所

P 1 0 1 5行目～2 5行目

P 1 1 6行目～4 2行目

P 2 1 3 9行目～ P 2 2

P 3 6 2 1行目～2 3行目

2 1行目

P
4
9
1
4
行
目
〜
1
5
行
目